

中学校・平成 30 年度第 2 回卒業証書授与式での校長式辞

東洋大学附属牛久中学校高等学校 校長 遠藤隆二



3月19日(火)午前9時30分から本校講堂において、中学校の平成30年度第2回卒業証書授与式が行われた。式後、休憩を挟んで卒業生主体の英語による「Adelaide 研修報告会」と「感謝の集い」が行われた。当日の校長式辞を紹介します。

【中学校平成30年度第2回卒業証書授与式の校長式辞】

桜が綻び始めた今日の佳き日に、御来賓の皆様をお迎えし、平成三十年東洋大学附属牛久中学校第二回卒業証書授与式を挙行できますことは、卒業生並びに保護者の皆様はもとより、在校生・教職員一同、誠に光栄に存じます。ここに、心より厚く御礼申し上げます。

七十四名の卒業生の皆さん、卒業、おめでとう。皆さんは、平成二十八年四月、本校の第二期生として入学し、建学の精神「諸学の基礎は哲学に在り」「知徳兼全」「独立自活」を基本理念に、教育目標の「高い志をもち、自ら考え、自ら行動する、意欲あふれる生徒」を目指し、私たち教職員と一緒に新しい「学校づくり」を行ってきました。今静かに目を閉じれば、皆さんの脳裏には、授業はもちろんのこと、河口湖でのHR合宿、球技祭での大縄跳び、All English DayでのNativespeakerの顔、創造祭での「英語落語」、British Hillsでの宿泊研修、AdelaideでのHomestayなど、本校での三年間の生活が走馬灯のように駆けめぐり、感無量なるものがあると思います。

皆さんが、今日、このように卒業式を迎えることができたのは、皆さん自身の努力の賜です。しかしながら、陰となって皆さんを支え、励まし支援してくださったご両親をはじめ、多くの方々のお陰があったことを忘れてはなりません。そのことを心に留め、お世話になったすべての方々に「ありがとうございました」と心の底から感謝の気持ちを表してほしいと思います。

先ほど皆さんに手渡した卒業証書には、二つの意味が込められています。一つは、三年間、たゆまぬ努力をして中学校の学業のすべてが修了したこと、もう一つは、九年間の義務教育が終了し、自らの判断と責任において、「自らの人生を自ら切り拓いていく出発点に立った。」と言う意味です。「卒業する」は英語で「Graduate」と言います。この「Graduate」には、「卒業する」という意味の他に、「次の段階に進む」「Level upする」と言う意味もあります。皆さんは、今、まさに「次の高等学校の段階に進み、自分自身を「Level upする」スタートラインに立っている。」と言えます。そのスタートの第一歩を踏み出すに当たり、特に大切だと思われることを三点ほどお話しします。

一つ目は、「明確な目標をもって、コツコツと粘り強く努力しなさい。」ということです。皆さん、ご存知のように、千円札の肖像画は「野口英世」です。その野口英世は、一歳の時に囲炉裏に手を突っ込み、大やけどをして左手の五本の指がくっついて棒のようになってしまいました。学校に行くようになると、学校では毎日のように、友達から「てんぼう・てんぼう」とからかわれ、いじめられました。十六歳の時にその左手の手術を受け、不自由ながらも左手の指が使えるようになった時の嬉しさと、医者仕事の素晴らしさに感激して、将来は「医者の仕事をしたい」と決意し、医者になるための勉強をするようになります。家が貧しかったので大学には行けませんでした。独学での猛勉強が実って二十一歳の時に医者の国家試験に合格し、医者になりました。医者になっても医学の勉強を重ね、京都帝国大学の医学博士や東京帝国大学の理学博士の学位を取り、多くの研究論文を発表しました。しかし、大学を卒業していなかったため、日本の医学界ではあまり認められませんでした。そこで、野口英世は、借金をして自由に研究のできるアメリカに留学し、ロックフェラー研究所の연구원となります。ロックフェラー研究所では、梅毒や毒蛇、中南米やアフリカの風土病などの研究で成果をあげ、新しい薬の開発に成功します。それらの薬の開発でアフリカや中南米の人々の多くの命が救われるようになりますと、その功績が認められ、「ノーベル医学賞」の候補者に三回もあがるなど名声を博するようになりました。しかし、野口英世は、当時アフリカで猛威を振るっていた黄熱病に苦しむ人々を救うために、アフリカに渡りますが、自らその黄熱病に罹ってガーナで亡くなってしまいます。風土病などで多くの人々が亡くなっていた中南米やアフリカでは、野口英世は、今でも命の恩人・ドクター野口として人々の尊敬を集めています。たった一度しかない自分の人生

を、最大限に生かすためには、野口英世のように、自分にも「必ずできる」という強い信念と、「やってやるぜ！」という強い意気込みをもって目指す目標に積極的に Challenge し、Try することが大切だと思います。志と明確な目標をもって苦しくとも諦めることなく、粘り強く、コツコツと努力してください。

二つ目は、「相手の良さや違いを認め、尊重して相手を思いやる・優しい人間になる努力をください。」ということです。皆さんは、昨年十一月、Australia の Adelaide で 1 人一家庭での Homestay による二週間の英語研修をしました。その時の皆さんの Hostfamily は、イギリス系・アメリカ系・インド系・ギリシャ系・ドイツ系・中国系など様々な family でありました。本校がお世話になっている Hamilton Secondary College の校長先生は、「七歳の時に両親に連れられてギリシャから移民した。」とおっしゃっていました。Australia は世界中からの移民で成り立っているグローバルな多民族国家です。Australia は、「英語という言葉」と「憲法という法律」で、一つの国にまとまっていますが、そこに住む人々の生活は、それぞれの祖先の生活スタイルが息づいており、宗教も食事などにもみな違いがあって、日本と比べてどの家庭もとても個性的だったと思います。多民族国家の人々は、それらの様々な違いを互いに認め合い、尊重し合って生活しています。からかいやいじめ、喧嘩や争いなどが起こらないように、誰もが安心して生きていくためには、互いの違いを認め、尊重し、相手を思いやり相手を大切に作る心、グローバルな心が必要になります。これから、私たちに求められることは、弱い立場の人たちをかばい、励まし・支援する心、人を思いやる・優しい心です。自分と同じくらい他人を大切に作る豊かで広い心をもてるよう、努力してほしいと思います。

三つ目は、「誠実で正直な人間でありなさい。」ということです。人との約束を守る、ルールや法律をきちんと守る、これは人間社会の基本的なルールです。「お金で買えないものはない」と言った社長さんがいましたが、人の心や信頼をお金で買うことはできません。都合の悪いことを隠したり、改ざんしたり、賞味期限や研究費をごまかしたりするなど、自分のことだけしか考えない、我儘、誤魔化し、嘘、不正などが横行している実態が毎日のように、テレビや新聞で伝えられています。それらのいずれもが、厳しく追及され社会的制裁を受けています。そして、それまで築き上げてきた信頼を一挙に失い、惨めな結果になっています。ごまかし、嘘や不正、ルール違反、手抜きなどの行為は、一時的に凌げたとしても必ず明らかになります。いずれも社会的に許されない、人間として恥ずべき行為です。毎日を正々堂々と、自信をもって過ごせるように、人との信義や社会のルールを守り、自分を偽ることなく、明るく、正直に生きてほしいと思います。詩人の高村光太郎は、「ぼくの前に道はない。ぼくの後には道はできる。」と言っています。皆さんは、全員が高等学校に進学します。中学校を卒業するこの機会に、これまでの自分をチェンジして、新しい自分に切り替え、高校での新しい道を力強く歩んで下さい。皆さんには、未来を築く豊かな創造力と若々しい行動力、そして、瑞々しい感性と優れた英知があります。中学校で学んだことを大切にしながら、多くの仲間たちと手を携え、自らの進む道を自信をもって力強く歩んで下さい。

★明確な目標をもってコツコツと粘り強く努力しなさい。

★相手の良さや違いを認め、尊重して相手を思いやる・優しい人間になる努力をください。

★誠実で明るく、正直な人間でありなさい。

以上の三点を、高等学校に進学する皆さんへの、餞（はなむけ）の言葉とします。今後の皆さんの頑張りとおいなる活躍、そして、皆さんの健康と幸せを祈念しています。

保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。大切に育てられたお子様の立派に成長した姿をご覧になって、これまでのご苦労を思う時、今日の喜びは感慨もひとしおのことと存じます。お子様は、今、義務教育を終え、新しい気持ちで高等学校の道を歩もうとしています。お子様の考えと行動を信頼し、これからも温かい目で見守っていただきたいと思っております。

最後になりましたが、ご来賓の皆様をはじめ、保護者の皆様！ これまで本校教育の充実発展の為に、多大なご尽力とご支援を賜りまして誠にありがとうございました。今後とも東洋大学附属牛久中学校・高等学校に対し、末永く、ご協力・ご支援を賜りますようお願い申し上げます、式辞と致します。



「Adelaide 研修」報告会の様子

課題研究の発表内容の掲示

中高の仕切になっている南館 2 階中央ポケットの壁面に中学 3 年のグローバル探究科目「教養」の時間に行った「ミニ課題研究」のポスターが展示されている。授業で学んだ「課題発見の技法」に基づいてテーマを設定し、12～2 月の 3 か月間に「製作・実験・フィールドワーク・インタビュー」いずれかの手法で行った探究学習の成果である。短期間にも関わらず、よく頑張ってまとめたと思う。生徒たちは「ああすれば良かった・次はこうしたい」という課題意識をもったようであり、高校での「課題研究」に繋げ、充実させてほしいと思う。